

21歳の別離

白血病とのたたかいに青春をかけて

遠藤 允



学研M文庫

目次

プロローグ

4

第一章 発病

..... 11

第二章 生い立ち

..... 49

第三章 ふれあい

..... 97

第四章 骨髄バンク運動

..... 125

第五章 恋と友情

..... 171

第六章 移植、そして死

..... 225

エピローグ

271



中堀 由希子

1971年11月14日、愛知県岡崎市に生まれる。90年3月、私立光ヶ丘女子高等学校を卒業。ニュージーランドで語学留学中の90年10月、慢性骨髄性白血病の告知（発病は5月）を受ける。帰国後、陸上自衛隊を中心にした講演やテレビ出演をこなしながら、ドナー（骨髄液提供者）登録を精力的に訴えつづけた。ようやくアメリカで適合するドナーが見つかり、92年11月13日骨髄移植を受けたが、肝不全などにより死去した。

一九九三年夏――。

登場人物がタレントではないCMが、茶の間のテレビに流れた。横向きに、ほほえんで語る女性は、若さがはじけるようだ。それがさらに、別人のような屈託のない笑顔を振りまく画面に変わり、左下にテロップがあらわれる。

「中堀由希子さん 18歳の時 慢性骨髄性白血病を発病」

笑顔がつつく。旅先である。箸つまんだ蕎麦を、撮影者に向かって差し出す。風格のある門前、JRの車内風景……。家庭用ビデオでの撮影だから、画像は鮮明とはいえないが、ごく親しい人が撮ったものとすぐわかるような、実に天真爛漫といった表情にびっくりさせられる。

やがて、画面をはみ出すほどに表情がアップし、右目から大粒の涙が頬を伝い落ちる。さらに左目からも一筋の涙が……。テロップが、また登場する。

「1993年1月12日死亡 享年21才」

この間、映像と文字のバックには、女声の歌が無伴奏で流れる。

「いくつもの夢を見た。いくつもの夢を追いかけた。きつと、だれかが叶えてくれると、最後の朝まで信じてた」

これを、男性ナレーターの声を受ける。

「あなたがその気になれば、助かる命があります」

初めて見る視聴者には、どこのコマーシャルか予想もつかない。

二筋の涙を流した表情が固定し、いきなり文字だけが画面に映る。

「骨髄移植推進財団 フリーダイヤル0120・377・465」

――文字で説明すれば、こんなに長くなってしまいが、このスポットCMはわずか十五秒である。

中堀由希子の生涯そのままに、まるでそれを凝縮したような短さだが、インパクトは強かった。

八月から九月にかけて、新聞が、テレビが、雑誌が、このCMを次々に取り上げた。それまで骨髄バンクの報道には割と冷淡だった全国紙までが、家庭欄のトップ記事に扱った。さらに、由希子がたどった生涯を改めて紹介する女性週刊誌があいついだ。

このスポットCMは、電通関西支社がボランティア的に制作し、大阪に本社のある

毎日放送（MBS）が三月から放映していた。毎日放送は、骨髄移植啓発キャンペーン『10万人目の奇跡』を九三年一月から繰り広げており、スポットは三種類を流したが、由希子のCMは七月までで七百三十本に及んだ。

ほかの二種類のスポットも、それなりに反響はあったのだが、由希子が登場したCMが放送されると、問い合わせの電話が殺到した。そのころは問い合わせ先に、ボランティア団体の関西骨髄バンク推進協会の電話番号が表示されていたが、三カ月の放映期間中、そこへ三千五百本もかかってきたのである。

それなら、全国に放映しても大きな反響があるはずだと、電通関西支社が全国三十の民間放送に働きかけ、七月末から九月にかけての全国展開となった。首都圏では東京放送（TBS）から一日に三回流された。

キャンペーンのタイトルが、なぜ『10万人目の奇跡』なのか――。

それは、日本骨髄バンク（骨髄移植推進財団と日本赤十字社で構成）のドナー（骨髄液提供者）登録目標が、当面は「10万人」だからである。登録者が十万人いれば、骨髄移植を必要とする患者の九割にドナーが見つかると思われている。

スポットCMが全国に流された影響が、如実にあらわれたのが骨髄移植推進財団への、問い合わせと登録申し込み数の増加ぶりである。マスコミに取り上げられた九月には、なんと問い合わせが過去最高の四千四百件近くに上った。前年九月が千三百件だったことを考えれば、その急増ぶりが歴然としている。登録申し込み数も三千八百件と、これも最高の数値を示した。

もう一つの数字を挙げよう。骨髄データセンター（日本赤十字社の血液センター）で採血を受けた登録者数は、累計で二万人の万台に達するまでに十五カ月かかった。それが、由希子が亡くなったあとに追悼番組が流されて以降の六カ月で、三万人の万台を達成してしまったのだ。「十万人」は、奇跡どころか、現実に近い数字となっている。

骨髄移植は、白血病や重症再生不良性貧血、先天性免疫不全症などの血液難病の患者が、薬による治療に効果を期待できない場合、最後に残された「治療が期待できる治療法」である。

かつて「不治の病」といわれていた白血病も、現代医療でかなり治るようになった。原因はわかっていない。だが、いつ白血病になってもおかしくはない。そこに、この病気の怖さがある。

俳優の渡辺謙や夏目雅子がかかった急性白血病は、薬だけの治療でもずいぶん多くの患者が社会復帰するようになった。むろん、それでも全員が助かるわけではなく、渡辺謙と夏目雅子は、明暗を分けた。

しかし、由希子がかかった慢性骨髄性白血病は、病気の進行を薬で遅らせることはできても、薬だけでは完治が見込めない。やがて、急性転化といって、薬が効かなくなる時期が必ずやってくる。だから、健康なドナーの骨髄液を点滴と同じ方法で、患者の体内に移し替える骨髄移植が期待されるのである。

骨髄バンクの必要性を、誰よりも実感していた由希子は、全国でドナー登録の呼びかけを展開した。テレビ番組にも進んで出演した。ドナーの増加が、闘病仲間にとっても大きな希望につながることを、知ったからである。

由希子のドナーは、アメリカ合衆国で見つかった。日本への初の輸入による移植を受けたものの、骨髄移植特有の合併症には勝てなかった。発病してから飲みつづけた薬によって、肝臓が大きなダメージを受けてもいた。主治医は記者会見で「ドナーがもっと早く見つかっていれば」と、無念の悔し涙をにじませた。

けれども、スポーツCMによって、日本骨髄バンクへのドナー登録者の増加に寄与したように、わずか二十一歳で天国へと旅立たなければならなかったとはいえず、天性

の明るさで生涯を貫いた由希子が果たした功績は大きい。

本書は、中堀由希子の「青春譜」である。

第一章 発病



一九九〇年十月――。

南半球のニュージーランドは、春たけなわであった。

中堀由希子は、愛知県岡崎市の私立光ヶ丘女子高等学校を三月に卒業し、四月から南島のクライストチャーチで生活を始めて半年を経っていた。サザンクロス語学学院で、一年間の留学生活を送っている真っ最中だったのである。

この語学学院は、光ヶ丘などカトリック系の姉妹女子高校三校と提携して、各校の卒業生を受け入れている。由希子ら三十一人の留学生は、それぞれ学院紹介のホームステイ先から通学していた。

春学期の中間テストを下旬に控えた十月十一日、恒例のバスハイキングが催された。ニュージーランドの歴史を勉強している時期だっただけに、行き先は、クライストチャーチ市内の、カンタベリー博物館やフェリーミード歴史公園などである。いずれも、日本人観光客がよく訪れる名所で、歴史公園では馬車に乗ってはしゃいだりしていた。だが、ホストファミリーのアンブラー家に帰宅した由希子は、ぐったり疲れてしまった。やがて、頭痛と熱が出た。風邪かとも思ったが、日中は抜けるような晴れ間だ

ったから、日射病かもしれない。

「まただわ。遠足というと、いつもこうなんだから」

夜に入ってから、岡崎市の自宅に電話をかけて母の知香子に伝えたが、母は意にも介していないらしかった。

「あなたの横着病が出たんじゃないの？　だけど、風邪は万病のもつていうから、無理はしないようにね」

両親と妹、それに伯母がニュージーランドにやって来たのは八月だった。家族旅行を楽しんで帰国していつてから、まだ二カ月もたっていない。あのときはブクブクに太って、病気など全く感じさせない元氣さだったので、体調の変化を告げても母が信じないのには仕方がない。

でも、時間がたつにつれ、いつもとは少し違うように思う。熱も高くなってきた。幼いころから、熱が出るとぐったりするのが常で、この日もすぐベッドへもぐり込んだ。

翌朝、目覚めたら体中がほてっていた。学校を休むことにした。

九月十日に春学期が始まって、もう三日も欠席している。試験が近いので、本当は休みたくない。だけど、身体がいうことをきかない。

十三日は土曜だから学校は休日だったが、熱はいっこうに下がらない。ホストマザーには、由希子がかかなり憔悴しょうすいしているように見えたらしい。マザーの姉が休日診療所へ連れていってくれた。診察の結果は風邪であった。

せっかくの日曜も、熱で寝込んでいた。もらってきた薬をきちんと飲んだためか、熱は少し下がってきた。十五日の月曜は体が軽く感じられた。そこで学校へ行ったのだが、帰宅してからまた調子が悪くなった。

「たまに調子を崩すと、長引くわねえ」

力なくつぶやいてみたものの、この半年あまり、体調がずっとよかったわけではない。実は、ニュージラランド入りした直後から、普通ではなかった。

五月ごろの自覚症状が、最も顕著だった。疲れやすくて、五メートルも走ると息切れがしていた。そのときも、ホームドクターへ連れていってもらった。貧血気味だからと薬を処方してくれたが、効果がないからいつしか飲むのをやめてしまった。あのころから疲労や息切れ、耳鳴りがときおり襲ってきていた。ふらふらして、救急車で病院に運ばれたのも、やはり五月のことだった。

そういえば、つい最近も、友人たちからかわれたことを思い出す。

「中堀、なんでそんなペンギン歩きしてんのよ。もう、おちやめなんだから」

由希子はポカンとしたものだ。バスに乗り遅れてはいけないからと一生懸命に走っていたのに、友人たちにはヨチヨチ歩きに見えていたらしい。

十六日には、ホストマザーがホームドクターに連れていってくれた。

「いま流感りゅうかんがはやっているから、それかもしれないなあ。それにしても、ちよっと熱が高すぎるのが気がかりだが……」

血液検査のため、由希子はそこで採血された。

十七日の水曜には目まいが加わり、夜になると耳鳴りがひどくて眠れなかった。それでも由希子は、バスハイキングのとき炎天下に長時間いたから、日射病が悪化したものとはかり思い込んでいた。胸の痛みを自覚してもいたため、ひよっとしたら肺がんかもしれないと、あらぬことさえ考えた。

そんな体調なのに、課題の英文日記だけは、この日までずっと書きつづけた。

《This morning I went to a different hospital. The doctor said "You have got something wrong" and I took a blood test. This evening my host mother said "The doctor called me and you have to take blood test again". So I'm going to hospital tomorrow. I'm really worry about this sickness. If I have got a cancer what shall I do. I don't want to go back Japan now.》(10月17日)



十八日になると熱は四〇度を越えた。ホストマザーに付き添われて、クライストチャーチ中央病院を訪れたのは昼過ぎである。語学学院で唯一の日本人スタッフである水澤雅子みずさわまさこも、クープマン校長に言いつけられて姿を見せた。病院は、市の中心部のハグレー公園の一角にあって、西側にエーボン川が流れている。

ほどなく、中央病院で受けた血液検査の結果が出た。このときの白血球数（一マイクロリットル当たり）は四十七万九千もあった。通常値が数千だから、健康人のざつと百倍に達していたのである。

由希子の横に水澤雅子が、二人の後ろにホストマザーが座って、女医の説明を受けた。雅子が通訳を務めた。検査結果の説明などは、すらすらと進んだ。

「ミス・ナカホリ、あなたの病気はリユーケミアです」

病名告知の瞬間である。

だが、医学用語には雅子もうとい。英和辞書を持ち出して指し示してもらった。訳文には、まぎれもなく「白血病」と書かれている。

雅子は言いよんだ。白血病となれば、大変な病気である。

伝えにくいらしいと気づいた女医が、雅子にきっぱり言い切った。

「ニュージールランドでは、どんな病気であっても、患者さんにはつきり告げます」

由希子は、雅子が示してくれた英和辞書によって、初めて自分の病名を知った。しかし、白血病がどんな病気であるか、このときの由希子はそう深刻に考えてはいなかった。

クライストチャーチ中央病院は、かかった医療機関としては三カ所目になる。由希子は講演などで、「四カ所目」と語っているが、これはおそらく、五月ごろかかっていた病院を一カ所目と勘定しての誤解だと思われる。

「それで、わたしの病気はどういう状態で、どうすれば治るんですか」

質問したら、女医が答えた。

「病気がいま見つかったからよかったけれど、もし何もしないままだと、あと二、三週間しかもたなかつたでしょうね。すぐ入院してもらいます。今晚にも白血球除去をやりましょう」

まさか入院するなんて思ってもいなかったから、何も持ってきていない。入院するなら、あれもこれもと、病室に持ち込みたいものがある。中でも手鏡は必需品だった。授業中にもものぞいていて、教師に叱られたくらいだから、病院生活では絶対に欠かせない。

だが、医師は帰宅させてくれなかった。そのまま病室のベッドに寝かされた。

どれくらい時間がたったろう。つい、うとうとしていた。気づくと、病室の外は夕景色になるうとしている。

ベッドの横には、牧野重紀子と赤星理香が、不安そうな表情で立っていた。二人とも、光ヶ丘女子高でのクラスは違ったが、ニュージーランドへ来てからは「三姉妹」のような仲になっていた。

「どうしたの？」

由希子には、なぜ二人がここにいるのかわからない。

「中堀の家ですつと待ってたけど、坊やが『病院に行った』っていうから来たのよ」試験が近づいているのに欠席がつづいている由希子に、ノートを見せようと、二人でアンブラー家を訪れて、由希子の病院行きを知ったのだ。

理香はホストファミリーから、由希子が白血病らしいと聞かされていた。だから、三人はしばらく無言のままだった。自然と三人の両目に涙があふれてくる。

それでも、いったんしゃべり始めたら、口が止まらない。話し好きの三人だったから、しゃくりあげながらもしゃべりつづける。日本語を自在にあやつれるのが、久しぶりだったせいかもしれない。

「中堀のことだもの、元気になって日本に帰れるよ」

「帰ったら何を食べようか」

たわいない話題も出た。

■ 奇跡的に回復

病院は病院なりに困惑していた。

白血球が五十万近くもあるのは、ガン化した白血球ばかりで占められ、正常な白血球が極端に少ないことを意味している。激増した白血球が、血管の途中で詰まる危険性もある。投薬治療より何より、ガン細胞に侵された白血球を除去することが先決だった。

そのための最新器具は買ってあったが、使ったことがない。主治医が取扱説明書を引っぱりだして、病院スタッフと一緒にチューブの接続を始めた。

不安そうな由希子たちの視線を感じたのか、主治医は明るく言い切った。

「うちでは初めて使えけれども、ノープロブレムよ」

白血球除去は二時間あまりで終わった。

水澤雅子は主治医から今後の方針を聞いた。

「うちの病院では最善を尽くしますが、彼女の治療はやはり日本が一番いいでしょう。体力が回復すれば、一日でも早く帰国させるべきだと思います。それまでに、日本での入院先を確保しておいてください。骨髄移植をすることも考えられますから、移植も可能な血液の専門家がいて、こちらとの連絡がとりやすいよう、英語を十分理解できる医師のいる病院が望ましいですね」

雅子は、由希子の自宅や、光ヶ丘女子高校との連絡役を引き受けることになる。雅子は由希子の入院中、ほぼ連日、病院へやってきたが、由希子は二日目に尋ねた。

「先生、わたしの将来はどうなるんでしょうか」

すぐに答えが返ってこない。質問をたたみかけた。

「わたし、勉強をつづけたいんです。日本に帰るとしても、前から行く予定になっている専門学校に行きたいんです」

由希子は気づきようもなかったのだが、このとき雅子は、由希子が自分の病気についてほとんど何も知らないのではないかと感じていたのである。

「まず病気を治すことが大事だわ。勉強はそれからでもできるじゃないの。なんだっ

たら、後半の勉強のためにまたニュージージーランドへ来てもいいのよ」

雅子はそう言った。

牧野亜紀子たちは、雅子から入院の事実を口止めされた。テストが迫っていたから、ほかの生徒が動揺してはいけないと配慮したのだ。

ランチタイムになると、いつもにぎやかな由希子がいないうえ、亜紀子たちも黙りこくっているものだから、学院の中は実に静かだった。

それだけに亜紀子たちは、遠慮なくしゃべれる病院へ毎日やってきた。亜紀子たちの来訪には本当に力強い思いがした。

「もつといてよ」

三姉妹になぞらえた三人の中で、一番下の妹役そのものの甘え方を、由希子は二人に見せた。二人もそれに十分こたえてくれた。

亜紀子たちには、由希子がここで危なくなるとは思えなかった。もうすぐ日本に帰ってしまおうと確信していたから、少しでも長く一緒にいてやれたらと考えていたのである。

入院二日目から抗ガン剤を投与された。数日を経てから、いたって元気になった。

結果的には、白血球除去とそれにつづく抗ガン剤の投与が、劇的な効果を挙げたよう
だ。

危機を脱してから、医師が由希子に語ってくれた。

「あなたの病氣、つまり慢性骨髄性白血病を完璧に治すには、骨髄移植をしなければ
なりません。その骨髄移植をするには、ドナーが見つかりやすい日本に帰ったほうが
いいでしょう。詳しい説明は、日本の病院で聞いてください。日本には骨髄移植で効
果を挙げている病院も、優秀な医師もいます。わたしたちは今まで、最大限の努力を
傾けました。あとは、神のご加護と日本での幸運を祈っています」

由希子は、このとき初めて骨髄移植という治療法があることを知った。ただ、医師
が「詳しいことは日本で」と言ったように、どういう治療法であるかは、よくわかっ
ていなかった。たとえ詳細な説明を英語で受けたとしても、理解はできなかったにち
がいない。

コンピューター・プログラマーのホストファーザーはスイスに出張していたが、妻
からの国際電話を受けて急いで帰国してきた。

退院を控えた由希子は、教科書などの私物を取りに、前ぶれもなく学院を訪れた。
由希子の姿は、友人たちを驚かせた。

「どうしたの、中堀」

見た目ではつきりわかるほど、由希子は細くなっていた。

「病院で体重を計ったら、十四キロも減っていたわ。どう？ スリムになったでし
よ」

一時期、六十五キロにも太っていた由希子は、いつも「痩せたい」と口癖のように
言っていた。それが、本人の望むスタイルに近づいたのだから、なんでもないとさな
ら喜びあうところだが、白血病で入院していたとあって、そうも言っていられない。
だいいち、周りの級友は、まだ白血病であるということも知らされていなかった。

学院に顔を見せた日、試験が終わった直後ということもあって、クープマン校長は
三十人の生徒を一室に集め、由希子が血液の病氣で入院していたことと、近いうちに
帰国することを伝えた。

一時的にせよ、病院を外出できるほど回復したと知った友人たちは、あらそうよう
に見舞いにやってきた。由希子は、そうした友人たちの一人に手紙を託した。

ニュージランドにやってきてから、手紙だけはいっぱい書いてきた。体調が落ち
着いた二十一日にも、入院してから初めて二通を書き上げた。封をしないまま手渡さ
れた友人は、病氣が病氣だけに、内容が気になっているらしい。

「いいわよ、読んでも。秘密は何もないから」

一読した友人は、こんな手紙を出しているものかどうか迷った。差し出し相手の一人は男性だが、白血病であることを、由希子はあつげらかんと記したのである。

「わかった、出しておくわよ」

結局この友人は投函しなかった。それを、由希子は帰国してから知ることになる。

■日本での受け入れ準備

由希子が入院した日、岡崎市の自宅にはすぐ連絡が入った。様子が落ち着いたのを見計らって午後十時ごろ、水澤雅子が国際電話を入れたのだ。時差の関係で、日本では午後七時ごろになる。

由希子が白血病と聞かされた知香子は仰天した。父の徳幸のりゆきにもはつきりわかるくらい、顔色がたちまち青ざめていった。

とにかく、日本での入院先を速やかに確保しなければならない。両親は知人たちから情報を得ながら、病院を探し回った。

由希子は、両親のそんな苦勞を知るはずもない。二十日朝になって、告知されてから初めての電話を自宅に入れた。

「もう、自分でトイレに行けるようになったんだよ」

明るい声に、両親がホッとする雰囲気を感じたが、夜になると熱が三九度台に上がる。二十一日朝にも電話をかけ、由希子は、退院が近いことを知らせた。

「日本で入院する病院を探しているから、決まるまではそっちに入院してて」

両親が名古屋第一赤十字病院に、小寺良尚こでらよしひさ第四内科部長を訪ねたのは、二十二日であった。集めた情報を総合した結果、由希子をここへ入院させようとしたのである。その日午前七時には、由希子が入院後三度目の電話をかけた。入院してから初めてシャワーを浴びることができ、気分がさっぱりしたところだった。

光ヶ丘女子高でも、ニュージージラランドへの留学生を送り込んで初めての大病だけに、対応におおわらわだった。当面の課題は、出発前にかけていた保険の扱いである。由希子の帰国に際しては両親が迎えに行くため、保険の中から救済費用が出るはずだ。

ところが、もし留学前から発病していたことがわかっていったのなら、その費用が出ない。高校在学中に発病していなかったことを証明するものはないかと、保険手続きに当たった旅行代理店から照会が舞い込んでいた。

「中堀は確か、二年生のときに献血をしていたと思いますが」

ある教師が思い出した。急いで保健室に保管してあった「献血承諾書」の束を探したところ、由希子自筆のものが出てきた。二年生の十二月に校内で献血をしており、しかも、そのときには異常が何ら指摘されていない。これによって旅行代理店も納得した。

母が、名古屋第一赤十字病院の入院手続きを済ませたのは二十八日だった。受け入れ準備はすべて整った。

由希子は、二十六日に退院してから、アンブラー家に戻った。熱も出ずに安定した体調がつづいていた。毎日午前中に病院へ行つての血液検査でも、白血球数は二十七日に一万を割ってから数千という平常値に戻っていた。

だからといって、慢性骨髄性白血病が治ったわけではない。白血球除去と抗ガン剤の投与によって、白血球細胞の増殖が抑えられたにすぎない。根本的な治療は日本の病院に任せるのが最初からの方針だったので、体調がよくなったこの時期に帰国するのが最もいい。

「すぐ迎えに来て」

三十日の朝、由希子は母に電話をした。水曜日である。成田からクライストチャーチへの直行便は週に五便あるが、この日を外すと次は経由便となってしまう。一刻をあらそうと思ひ込んでいる母は、前から依頼しておいたチケットの手配を岡崎市内の旅行代理店に連絡した。

午後五時二十五分発のニュージールランド航空九〇便に搭乗できることになったが、チケットが間に合わない。いつもどおり会社へ出勤していた父が急ぎ帰宅し、とにかく、成田へ少しでも近づこうと、両親は名古屋から新幹線に乗った。

新幹線の車内電話を使ってチケットの手配状況を聞くと、東京にある代理店の営業所職員が、東京駅まで届けてくれることになり、ようやく安心したのだった。

東京駅からタクシーに飛び乗った。折から豪雨とあってスピードが遅い。それに検問にぶつかったりして、やきもきしたが、飛行機の出発も雨のため一時間遅れとなった。

客席は半分以上埋まっていた。クライストチャーチまでの飛行時間はおよそ十一時間である。食事が二回出されたが、知香子はほとんどをとおらなかつた。

電話での由希子の声は元氣そうに聞こえたが、あれは親を安心させるためだったのではないだろうか、実際は病魔にとりつかれて、げっそりやせ細っているのではある

まいか……。そんなことばかりが頭の中を駆けめぐる。周りの乗客が眠りに就いても、目は冴えるばかりだった。

少しはまどろんだかなと思つたら、小さな窓から朝の陽光が差し込んでいた。

退院後の由希子の様子は電話で聞いていたが、半信半疑のまま両親はクライストチヤーチ空港に降り立った。ほんの二カ月前の八月にやってきたばかりなのに、あのときの浮き浮きした気分が、今は暗くうち沈んでいる。

だが、迎えにきているはずのクープマン校長と水澤雅子の姿がない。公衆電話を探しだし、アンブラー家に電話をかけた。

「ハロー」

由希子は、シャワーを浴びているホストマザーに代わって、受話器をとった。聞こえてくるのは、まぎれもなく母の声だ。

「お母さん、今ごろどうしたのよ」

「あんたこそ、何をしてるの」

体調を取り戻している由希子のほうがびっくりするような、緊迫した声だ。

「もう、すっかりいいのよ。それはいいけど、お母さんこそどうしたの」

九時三十五分到着というところが、旅行代理店からのファクスは、なぜか十九時と

間違っていたのだ。そのため由希子も水澤雅子も、両親の到着はてっきり夜に入ってからと思ひ込んでいた。

「わたしが迎えに行くわ。そのまま待ってて」

ホストマザーがシャワー室を出てから、由希子はホストマザーが運転する車で、空港へ両親を迎えに出た。

「ヘーイ」

両親を見つけた由希子は、すっかりニュージールランド生活になじんでいた。七カ月前近くを経っていたから、むしろ日本の友人たちに出す手紙の日本語にとまどうような日々を過ごしていたのである。

「あんた、病気なんかじゃないじゃない」

母があきれたのは、痩せたと聞いていたのに、八月に会ったときとあまり変わらぬ姿だったからだ。実はこれが、由希子の悩みでもあった。せっかくなスリムになったのに、退院してからの食事のおいしさには抗し切れなかった。わずかなあいだに、アツという間に体重が回復してしまっていた。

■ 十九歳の誕生日パーティー

昼食はホストの自宅でとったが、そのときにはホストフアーザーも会社から戻ってきた。やがて三人の子どもたちも帰宅してから、由希子は両親と一緒に市内のホテルにチェックインした。

十一月一日には、午前中にサザンクロス語学学院を三人で訪れ、両親がクープマン校長ら教師陣にあいさつをし、記念品を一人ひとりに手渡した。そうしたら、クープマン校長が由希子に誕生日プレゼントを持ってきた。生徒の誕生日には必ずプレゼントをする校長だった。

由希子の誕生日は十一月十四日だ。十九歳になる。翌日にはクライストチャーチをあとにすることになっていたので、午後三時過ぎからアンブラー家で、ひとあし早いバスデーパーティーが催された。

授業を終えた生徒たち、とくに光ヶ丘女子高の卒業生はほとんど顔を見せた。アンブラー家は、友人たちの笑顔と歓声に包まれた。

「卒業式のあと、英会話の勉強をしていたときの話題、覚えてる？」

二月二十四日の卒業式を終えても、由希子ら留学組は学校に顔を出し、毎日一時間

半ほど日常英会話を勉強した。

「なんだっけ」

とにかく、いろんなことを語り合ったから、いきなり問われてもどの話題なのかわからない。

「ほら、『中堀が一番早く強制送還されそうだね』って、みんなで言ったじゃない。病気っていうのは信じられなくて感じだけど、やっぱり中堀が一番早く帰ることになっちゃったんだねえ」

五月に帰国した生徒が一人いるが、それは自己都合だった。本人は残りたいのに帰国しなければならないのは、由希子が最初で最後である。

「でも、あのとき『ボーイフレンドつくっても、見つからないようにせんとね』なんて言ってたけど、だれもいい男いないじゃん」

顔を見合わせながら、大笑いとなった。

「中堀なんかさあ、マオリの少女に間違われたんだよ」

マオリとは、ニュージージーランドの先住民族である。

「来たばかりのころ、近くのテニスコートで日本人ツーリストと一緒にプレイしたときよ。初対面で『アーユーマオリ?』って言うわけ。中堀って、そのあと『シヨッ

くだ』ってブンブンしてたけど、あのころは、そう見られても変じやないくらい、顔が黒くなつてたもんね」

みんな屈託なくしゃべっては、笑いつづける。何を語っても、おかしくて仕方ない表情だ。それなのにわたしは帰らなくちゃならない。本当に病気なのかしらと、由希子はいよいよ半月前からの出来事が、夢のような気がした。

「帰りたくないよね」

集まってきたホストファミリーの顔ぶれを見ながら、由希子がつぶやく。アンブラー家の姉夫婦や祖母などもやってきて、お別れ会を兼ねた由希子の誕生日を祝ってくれている。七カ月一緒に暮らした由希子には、この家に楽しい思い出ばかり詰まっている。

友人たちには、半年もしないうちに日本で再会できるが、ホストファミリーにはいつ会えるかわからない。ホストファミリーと折り合いが合わず、滞在先を替えてもらった友人たちもいるが、由希子が世話になったアンブラー家は、本当に居心地のよい一家だった。

ホストマザー手づくりのバースデーケーキが運ばれてきた。ウサギの顔が描かれている。岡崎市の自宅には、飼い始めて四年になるオスのウサギが由希子の帰りを待っていた。ハチと名づけられ、由希子にとってもなついていた。ホストファミリーにもしよちちゆう話していたので、それを覚えてくれていたのである。

「これが、太るもとなのよね」

言いながら、ケーキについて手が出してしまうのが情けない……。

パーティーの余韻に静かにひたりながら、由希子と両親はホテルに戻った。

二日はいよいよクライストチャーチをあとにする日だ。アンブラー家で由希子の荷造りをしたが、なんと段ボール四箱にもなった。現地で買った衣装が多い。それらは郵送することにした。

午後五時半、クライストチャーチ空港からオークランドへ向かった。見送りにきた友人たちは、初めのうちこそ談笑していたが、出発時間が近づくにつれ、少しずつ静かになり、由希子たちが搭乗口へ向かう時刻になると、そろって涙を流した。由希子も例外ではない。

友人たちは、年明けの三月には帰国してくる。それまで病気が急変するとは考えられない。また会えるとわかっていても、別れの瞬間はいつも悲しい。高校二年の夏休み、短期のホームステイで初めてニュージーランドを訪れたとき、今回の留学ほど感



激したわけではなかったのに、それでも日本へ帰る日には、ホストファミリーとの別れがつらく悲しくて、由希子は大泣きしたものだ。

オークランドで一泊した由希子と両親は、三日午前八時にニュージーランド航空二三便で日本へ向かった。座席はほぼ半分が空いていた。二三便はワイジーに立ち寄ったが、機内で由希子は、何人かの友人からもらった手紙に目をおしていた。

何通目かの封筒をあけて、見慣れた文字に出くわしてびっくりした。由希子を書いて、赤星理香に渡すはずだった手紙だ。何、書いたっけ？

《スツゴク仲良くしてくれて、本当にありがとう。毎日毎日電話して、いろんなこと話したね。バンジージャンプにトライできなかったこと、とつても残念だけど、帰ったら一緒に国際観光に通おうね。私、元気になって新曲歌って、カラオケボックスの中で待ってるからね。英語、教えてね。私の六カ月はなんてケムシのようだったんでしょう。まだチョウチョウになれないうちに、またジャパンよ。帰ったら、ニュージーランドでの思い出、書くんだけ。自伝でも書いて本でも出版しようかしら。みんなが帰ってくるとき、飛行場まで迎えに行くね。スリムになった私をお楽しみねっ》

国際観光というのは、名古屋市内にある専門学校の名称である。由希子は一年間の

留学を終えてから、そこへ通学する予定になっていた。理香もその一人だったのである。

絶望感はない。あくまでも、人生を明るく、前向きに考える由希子であった。

■名古屋第一日赤に入院

ニュージーランド航空二三便は、ほぼ定刻どおりの十一月三日午後五時過ぎ、成田に到着した。

人込みをなるべく避けるため、東京駅までタクシーを利用し、八時二十分発のこだまに乗車した。豊橋にはこだましか止まらない。豊橋で名鉄に乗り換えるのだ。発車する前、プラットホームで買った駅弁を、由希子は母の分までたいらげた。

由希子の「帰国第一声」は、こだまを降りた豊橋駅からの電話である。三十分もあれば自宅に着くのだが、時刻はもうすぐ午後十一時になる。

電車を待つ時間を利用して、少しでも早くだれかに帰国を伝えたかった。かける相手となれば、高校時代の友人が真っ先に対象になる。



「今ごろ、どうしたの」

相手の青木美嘉は、名古屋に下宿して大学へ通っている。まさかすぐ近くからかけているとは思えないようだ。

「いま豊橋にいるのよ。わたし白血病になっちゃった」

「またまた冗談を」

「ほんとよ。五日に名古屋へ入院するから、また電話するね」

高校時代とまったく変わりのない話しっぷりに、美嘉はいまひとつ信じられない気分らしかった。

次は、岡崎市内に住んでいる大岩久美だ。久美は短大へ行っていて、由希子の発病がなければ、冬休みにニュージールランドで再会するはずだった。

その次にかける相手は……。

自宅に到着したときは、深夜の十二時近くになっていた。時間も時間だし、さすがにこの日はすぐ寝入った。

翌四日は日曜である。月曜に入院することになっていたので、丸一日の余裕がある。体調はすこぶる良好で、この日は、高校時代の友人を中心に電話をかけた。まくった。

白血病になって日本に帰ってきたけれど、すぐ入院しなければならないの……とい

う内容に終始した。だれもが「エエツ」と、電話の向こうで一瞬絶句する。

白血病って、そんなに怖い病気なのかしら……。こんなに元気なだから、ひょっとしてニュージールランドのお医者さんの誤診じゃないかしらと、由希子だけでなく、母もそう思っていた。

十一月五日、由希子は名古屋第一赤十字病院に入院した。「名古屋第一日赤」とも呼ばれるが、地元では「中村日赤」でとおっている。中村区にあるからで、地下道でつながっている最寄りの市営地下鉄の駅名も「中村日赤」である。

病棟で由希子が目にした患者は、髪の毛が抜け落ちて、ほとんど例外なく痩せていた。それに比べて由希子自身は、クライストチャーチ中央病院を退院してからまた太り始め、このころには優に六十キロを超えていた。ぜんぜん病人らしくない。

それもさることながら、病室にあらわれた由希子は、病棟看護婦を仰天させた。

「オイオイ、その格好はなんじゃらほい」

口にごそ出さなかったが、居並ぶ看護婦の気持ちはその一点に尽きた。

黒のタイツにミニスカートの由希子は、とてもはつらつとして見える。それはいいのだが、由希子は旅行用スーツケースを引っ張って、台車の音を高らかに立てながら、



病院内を闊歩したのである。

しかも、マンボウのぬいぐるみを抱えた姿が、看護婦をびっくりさせたらしい。このぬいぐるみは、ニュージールランドにまで持っていった。由希子お気に入りのもので、中のゴムに空気を吹き込んでふくらませる。

「雑菌が付着しているおそれがありますから、これはお母さんが持ち帰ってください」

有無を言わせない迫力で、看護婦が言い切った。

「あんなに元気なのに、本当に白血病なんですか」

紹介された病棟主治医の赤塚美樹医師に、母が尋ねた。赤塚医師の手元には、クライストチャーチ中央病院から託された診断書がある。それに目を通しながら赤塚医師は断言した。

「間違いありません。慢性骨髄性白血病です。この病気の場合は、外見からはお嬢さんのように病人と見えないことが多いんですが、白血病細胞の増加を抑える治療をつげなければなりません」

両親が病気の説明を聞いているあいだ、由希子は病棟看護婦から入院オリエンテーションを受けていた。

「わたし、白血病なんです。ニュージールランドでそう言われました。白血病の本は、ここには置いてないんですよ？」

看護婦はポカンとした。風邪にでもかかったような調子で白血病を口にする患者は初めてだ。それに、病院では告知しない原則になっていたのを、由希子は知らなかった。

「もう、どこも悪くないから、早く家に帰りたいなあ」

確かに、心配するような症状は全く出ていないが、入院してきたばかりの白血病患者が、そうすぐに退院できるものではない。

実際、ニュージールランドで告知を受けていたものの、由希子には白血病や骨髄移植についての知識は、そうなかった。

「わたしの病気って、髪の毛が抜けてしまうの？」

入院中の患者を見て、由希子には自慢の髪の毛が一番の心配になった。

一方、両親にとって、骨髄移植という言葉は聞いていたが、それが一体どのようなものであるかの詳しい説明は初めてだった。由希子は、その場にはいない。

「動物の骨というのは、ちょうどチクワのように真ん中が空洞になっているんですが、実はそこにゼリー状の組織があって、それが骨髄なんです。血液はこの骨髄でつくら

れています。おおもとなるのが造血幹細胞かんとくです。一般的にはこれを骨髓液と呼んでいます。それが細胞分裂を繰り返しながら赤血球や白血球、血小板ちゅうしょうばんに成熟して血管に流れ出ていく仕組みになっているんですよ」

赤塚医師は、造血機能の説明から始めた。

「慢性骨髓性白血病の場合は、おおもとの造血幹細胞が、なんらかの原因でガン化してしまい、白血球細胞に侵された白血球が異常に増殖するんですね」

「なんらかの原因といいますと？」

「なんらかと言うしかありません。白血病の多くは、原因がわかっていないんです」「すると、治療もできないということなんでしょうね？」

「いえ、原因がわかっていない割には、治療方法はずいぶん進歩してきました。急性白血病ですと、薬による治療だけでかなり治癒できるようになってきています。ただ、慢性骨髓性白血病は一時的に進行を抑えることはできますが、そのままではい

ずれ薬が効かなくなる時期がやってくるんです」「そうやってしまうかと？」

「打てる手はほとんどありません」

「じゃあ、死ぬしかないんですか？」

「いや、そこで骨髓移植こせいちゆが考えられたんです。ガン化した患者さんの骨髓液を放射線や抗ガン剤によって死滅させ、そこへ健康な人の骨髓液を点滴と同じ方法で入れます」

「じゃあ、それをすぐにやってください」

「残念ながら、そういうわけにはいきません。だれの骨髓液でもいいというわけではないんです。HLAエイチエルエーというものがあって、これは白血球の血液型けつえきぐちと違って、こればいいんですが、これが一致してないと、移植しても成功はおぼつきません。このHLAは両親から遺伝されますから、兄弟姉妹間での一致率は四分の一です」

由希子には妹が一人いる。三歳下の久美子くみこだ。さつそく六日に、由希子には内緒で久美子と両親がHLA検査のための採血を受けた。

「骨髓移植に必要なHLAの適合を調べるには、A・B座、DR座の順に照合します。それが一致していることがわかれば、三回目の検査として、患者さんと骨髓液提供者とのリンパ球をませあわせて、相性を調べることとなります」

HLAの検査結果が出たのは二十九日だったが、久美子とは一致しなかった。由希子のHLAタイプのうち、B座が日本人にはマレなタイプだったのだ。

「それはお父さんのほうから受け継いでいますから、お父さんの親族に適合者がいる

可能性があるため、そうした方々のHLA検査をやってみてください」

赤塚医師に告げられた両親は、徳幸の故郷である大分県の親族に検査を依頼した。知香子はもともと岡崎市の出身である。

親族の中からHLAが適合するドナーを探す作業は、由希子には一切知らされないまま進められていた。しかし、適合者はいなかった。そうなるのと、頼れるのは他人しかない。善意のドナー（骨髄液提供者）をプールしておくのが骨髄バンクだが、由希子が高校三年生の八九年十月二十一日に、民間組織の東海骨髄バンクが旗揚げしたばかりであった。

■ミニ台風の通過

入院三日目の十一月七日には、早くも外泊が認められた。正確には「認めさせた」というべきかもしれない。なにしろ、ニュージールランドでの治療がよほど効果を挙げたらしく、由希子には自覚症状がまるでない。病室にじっとしているほうが、かえって疲れを覚えてしまう。食欲も旺盛だった。十二日までの外泊は自宅で過ごした。

相変わらず元気いっぱい由希子は、十一月十四日に十九歳の誕生日を迎えた。

両親がケーキを携えて病室を訪れたが、由希子にとってもっと嬉しかったのは、翌十五日に高崎直之（仮名）たかさきなおゆきが見舞いにやってきたことだった。

直之は、留学する前に知り合ったボーイフレンドである。由希子と同じ学年だったが、大学入試に失敗して、一浪生活を送っていた。

「来てくれたのね。でも、わたしこんなになっちゃった」

こんなに、というのは二つの意味がある。白血病になったのと、太ってしまったのとである。どちらかといえば、太ったほうに恥ずかしさを感じていた。

「ついぞと言っちゃなんだけど、ここにくるのは楽なんだ」

一浪中の直之は、名古屋駅前の予備校に通学していた。

「女子高の友達も二人、そこに行ってるわよ。退院したら授業をのぞいてみようかな」

由希子は実際、外泊中や退院後にそれを実行した。『モグリ予備校生』はひどく冒險心をかきたたせてくれたのである。

別の日に直之が見舞いにやってきたとき、たまたま光ヶ丘女子高の岡本英輔校長が病室を訪れたことがある。

「すつごいなあ、校長先生が見舞いにくるのか。おれたちの学校じゃあ、在学中でも校長と話す機会なんかないんだぜ」

直之がそんな感想をもらした。見舞い客はむろん直之だけではない。高校時代の親しい友人たちには電話で知らせてあったから、次々と訪ねてきてくれた。それが嬉しい。

ただ、由希子は気づきようがなかったが、この入院中、病棟看護婦はハラハラのしどおしであった。検温の時間になっても病室にいない、フロアに数少ない公衆電話をほとんど占領するようにかけて、消灯時間を過ぎても受話器にしがみついていることが多い。

何度も注意を受けるうちに、由希子は病室から遠く離れた公衆電話を利用するようにもなっていた。

「だって、病室では何もすることがないんだもん。ねねね、看護婦さん。テレホンカードはもうトランプと同じ枚数を使ったよ」

屈託のない由希子に振り回されながらも、看護婦は苦笑するしかなかった。

太めの由希子だったから、あるときは骨髄移植のドナーと間違われたこともある。

「お若いのに立派ですね。ありがとうございます」

「いえ、わたしは白血病の患者なんです」

話しかけてきた中年の婦人に答えたら、相手がポカンとしていた。

そういえば、両親が小寺良尚医師のところに挨拶に赴いたときの話がある。

「いやあ、やんちゃそうなお嬢さんですね」

小寺医師が、笑いながらそう言ったという話を、母からよく聞かされた。由希子は病室で小寺医師に会う機会がほとんどない。さすが偉い先生は病室にあまり顔を出さないのかと思っていた。ところが実際は、部長回診のときに、由希子が病室にいたためしかなかったのである。

部長回診のときだけではない。自覚症状らしいものがないから、一階の売店付近をうろついたり、公衆電話をかけつづけたりで、病室に寝ていることのほうが珍しい。

そんな由希子が、泣き騒いでナーズステーションに駆け込んだのは十二月十五日のことだった。

「どうしたの?」

「今すぐ、家に帰らせて。もう、この病院にいるのはいやだ!」

面会室で話を聞こうとした看護婦に、由希子は灰皿を指さした。そこに、十本ほどの長い抜け毛があった。

「さつき、みんながいるとき体格の話になって、みんながブタって呼んでいる人に、わたしもそう言ったのよ。そしたら『薬のせいでこうなってるんだ。お前だって、もうすぐこうなるんだぞ』って言うから、『わたしは、そんなブタみたいにはならないもん』って答えたら……」

三十代の男性患者がいきなり怒りだし、スリッパを投げつけてから、由希子の髪の毛を思いつきり引つ張ったのだ。

「わたしも悪かったって思うけど、怖いよ。もう家に帰りたい、電話して迎えに来てもらって！」

午後十時になっていた。赤塚医師がまだ院内にいたから、由希子を説得にかかったが、とにかくあの男性患者が恐ろしかった。

夜中の十二時に迎えに来た両親に連れられて、由希子は帰宅した。

二日間の外泊を終えてから、元気がっぱいに病室へ戻った。

年明けの九一年になっても、由希子の「やんちゃぶり」は変わらない。あるときは、目覚めてすぐ、外出のため化粧を始め、看護婦の制止を振り切った。

「友達と約束したんだから、中華料理を食べに行くの。いまさらダメだって言ってもいやだよ」

午後一時過ぎに帰ってきて、そのまま昼寝に入った。フルコースを堪能したから、病院の夕食はとでも食べられなかった。

こうした突然の外出が、数回はあった。それなのにマスクをしない。一月半ばの外泊では、バーゲンセールに二日連続で駆けつけて疲れは出たが、マスクはしていなかった。

「いやだよ、面倒だから。お母さんが風邪をひいてたけど、あつちがマスクをすればいいんだよ」

外出の折には、感染予防のためマスクが欠かせないことは、入院オリエンテーションでも言われていたのだが、改めて看護婦からこんこんと諭されてしまった。

入院中に由希子が氣にしたことといえば、虫歯くらいだった。

九一年一月二十八日に退院となった。二十五日の検査で、白血球が五千七百、血小板が四十万と、健常人と変わらない数値で、通院によっても十分コントロールできると判断されたからである。

薬の服用と、一週間に一度の通院はつづくが、由希子は素直に喜んだ。

退院の日、看護婦たちにホッとした表情が流れていることに、はしゃぐ由希子は氣

づきようもなかった。由希子の退院で、看護婦は「ミニ台風」が通り過ぎたような実感を味わっていたのだ。

看護婦たちが最も困ったのは、由希子が「白血病」を平気で口にするのであった。告知をしないのが原則だったので、不用意に言いふらされると、正確な病名を知らされてない患者が、自分も同じ病気では？ と疑いかねない。

第一回の入院は八十五日間だったが、外泊は八回で延べ三十六日にも及んでいる。

母が運転する車に乗って名古屋市内を走っているうちに、「人込みは避けること」と言われた退院指導の言葉は、すっかり頭の中から消えていた。カラオケで騒げるのが、退院してからの何よりも大きな楽しみだったのである。

慢性期に入ったことが確認された由希子が、赤塚医師を通じて東海骨髄バンクに患者登録したのは、退院後の二月五日であった。